

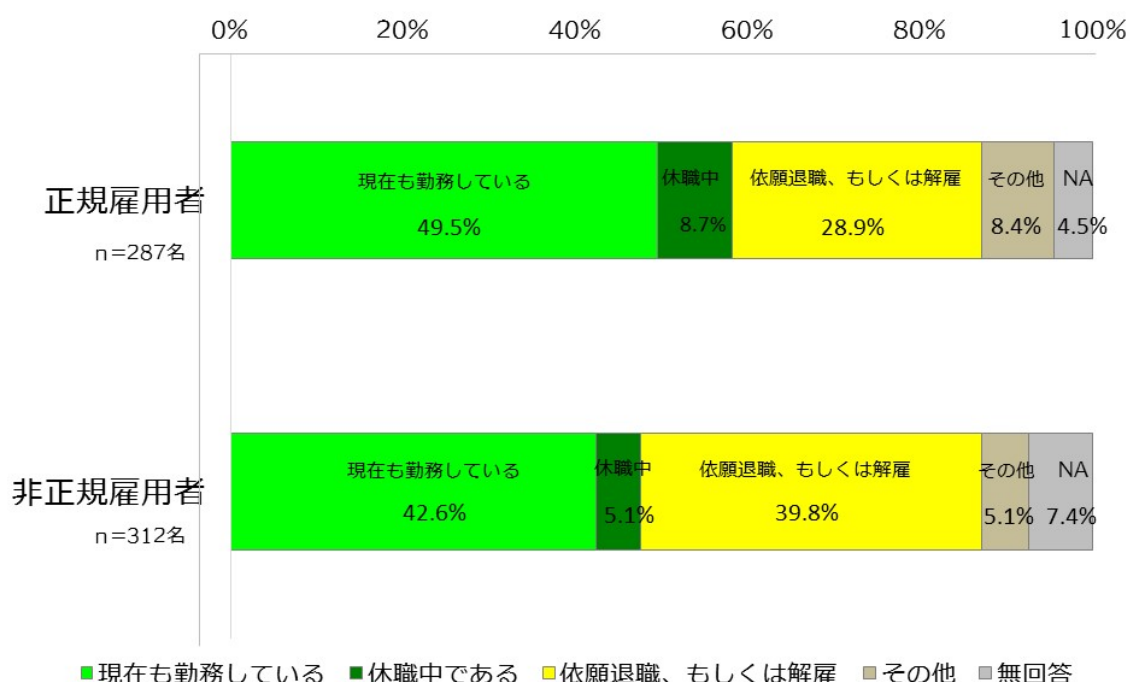
## このトピックスの要点

- ◆ 乳がん体験者の就労状況をみると、がんと診断後、非正規雇用者では「依願退職、もしくは解雇」の割合は4割を占め、正規雇用者より高い。(P.83)
- ◆ がんと診断時に、「仕事を辞めたい」と考えた乳がん体験者は、正規雇用者は1割であるが、非正規雇用者では2割を占める。(p.85)
- ◆ がんになっても安心して仕事を続けるために必要な支援としては、正規雇用者、非正規雇用者ともに、就労環境の整備（制度）に関する項目が上位にあがっている。(p.86)
- ◆ 診断時から現在まで仕事を継続するためには、家族、友人、仕事関係者など周囲の人々によるサポート（ソーシャルサポート）の重要性が示唆された。(p.87)
- ◆ 非正規雇用者の場合、上司や人事労務担当者などの仕事関係者への相談は正規雇用者を下回り、相談しにくい、もしくは相談しても意味がないと考えている可能性が示唆される。(p.88-p.89)
- ◆ がんと診断された当時の仕事に関する悩みでは、正規雇用者は、仕事を継続することを前提にしたうえでの悩みが上位に入っているが、非正規雇用者の場合は、半数が「仕事を辞めるかどうか」で悩んでいる。(p.90)
- ◆ 非正規雇用者でがんと診断後離職した人のほぼ半数は3ヶ月未満までで離職している。(p.92)

(1) がんと診断後の就労状況の変化：正規雇用者・非正規雇用者比較（乳がん体験者）

乳がん体験者の正規雇用者と非正規雇用者で、診断後の就労状況の変化をみると、非正規雇用者は、「依願退職、もしくは解雇」の割合が高く、4割近くを占めている。詳しくみると、「依願退職した」では、正規雇用者 68 名（24.8%）、非正規雇用者 115 名（39.8%）、「解雇された」は、正規雇用者 15 名（5.5%）、非正規雇用者 9 名（3.1%）とある。

図 10-1 正規雇用者と非正規雇用者 乳がん体験者就労状況の比較



注意点

- 調査票 A・調査票 B の両方を集計した結果をグラフ化した。
- 全体の調査結果では、無職のがん体験者もいるため、無回答を除いて図表化しているが、この章では、乳がん体験者の正規雇用者と非正規雇用者のデータを抽出して解析しているため、無回答も加えている。
- なお、調査票 B は、就労に関する設問は、問 24(問 24-1-問 24-3)までのため、(3)以降は、調査票 A の回答のみで集計した。

## (2) 仕事の内容

表 10-1、表 10-2 は、仕事の内容を、診断時点と現在に分けて確認した結果である。正規雇用では、事務の仕事が 1/3 を占め 2 番めは専門的職業であるが、非正規雇用では、販売と事務の仕事が 1/4 でほぼ同じである。

表 10-1 仕事の内容：正規雇用者

<正規雇用者>

正規雇用者 乳がん				
仕事内容	診断時点の仕事の内容		現在の仕事の内容	
	実数	(%)	実数	(%)
農林漁業	1	(0.3%)	0	(0.0%)
運輸・通信・保安職	2	(0.7%)	2	(0.7%)
生産工程作業従事者	19	(6.6%)	12	(4.2%)
サービス従事者	23	(8.0%)	15	(5.2%)
販売的職業	30	(10.5%)	19	(6.6%)
事務的職業	101	(35.2%)	70	(24.4%)
管理的職業	7	(2.4%)	6	(2.1%)
専門的職業	83	(28.9%)	60	(20.9%)
その他	19	(6.6%)	20	(7.0%)
無回答	2	(0.7%)	83	(28.9%)
計	287	(100.0%)	287	(100.0%)

表 10-2 仕事の内容：非正規雇用者

<非正規雇用者>

非正規雇用者 乳がん				
仕事内容	診断時点の仕事の内容		現在の仕事の内容	
	実数	(%)	実数	(%)
農林漁業	1	(0.3%)	1	(0.3%)
運輸・通信・保安職	1	(0.3%)	1	(0.3%)
生産工程作業従事者	31	(9.9%)	23	(7.4%)
サービス従事者	38	(12.2%)	22	(7.1%)
販売的職業	73	(23.4%)	45	(14.4%)
事務的職業	73	(23.4%)	50	(16.0%)
管理的職業	0	(0.0%)	0	(0.0%)
専門的職業	38	(12.2%)	31	(9.9%)
その他	36	(11.5%)	29	(9.3%)
無回答	21	(6.7%)	110	(35.3%)
計	312	(100.0%)	312	(100.0%)

### 注意点

- (3)以降の設問は、調査票 A の回答を集計したものである（調査票 B は、就労状況の設問は、問 24 で終了となり、以下の設問はないため）。

### (3) がんと診断時の仕事に関する思い

がんと診断されたときに、仕事に関してどのように思ったかに関して、「仕事をこれまで通り続けたい」と回答した人は、正規雇用者(137名:53.1%)が、非正規雇用者(118名:41.0%)より1割多かった。「仕事を辞めたい」と考えた乳がん体験者は、正規雇用者では1割(26名:10.1%)であったが、非正規雇用者では倍の2割(55名:19.1%)を占めていた。

表 10-3 がんと診断された時の仕事に関する思い

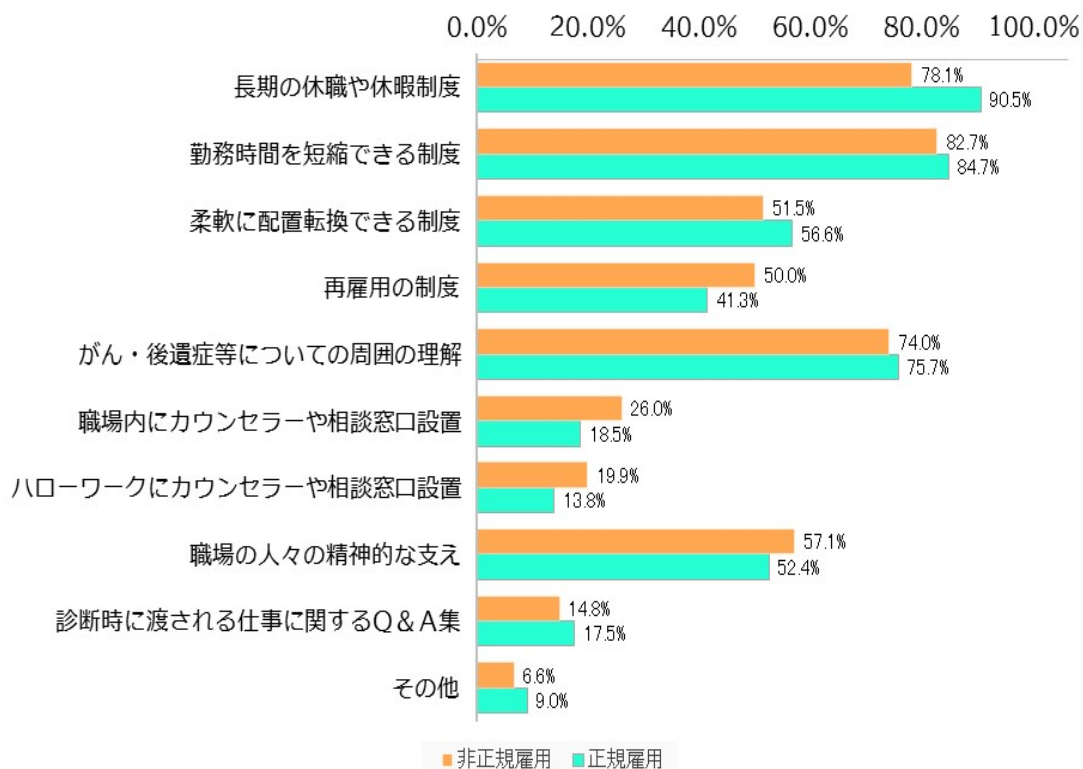
診断時の仕事に関する思い	正規雇用者		非正規雇用者	
	実数	%	実数	%
仕事をこれまで通り続けたい	137	(53.1%)	118	(41.0%)
以前よりペースや業務量を落として仕事を続けたい	51	(19.8%)	58	(20.1%)
仕事を辞めたい	26	(10.1%)	55	(19.1%)
仕事のことは考えなかった	13	(5.0%)	8	(2.8%)
その他	8	(3.1%)	10	(3.5%)
無回答	23	(8.9%)	39	(13.5%)
計	258	(100.0%)	288	(100.0%)

#### (4) がんになっても安心して仕事を続けるために必要な支援

がんになっても安心して仕事を続けるために必要と考える支援をみると、正規雇用、非正規雇用と同じような傾向であるが、[再雇用の制度]、[相談窓口設置]は非正規雇用者のニーズのほうがわずかではあるが高い傾向にあった。非正規雇用者の方が、どこに（誰に）相談したらよいか戸惑っている状況が伺えた。

第二次調査全体の結果と同様、就労環境の整備（制度）に関する項目が上位にあがっていた。また、「がん・後遺症についての周囲の理解」は、第二次調査全体の結果では55%とほぼ半数であったが、乳がん体験者の場合、正規雇用者・非正規雇用者ともに7割を超える体験者が仕事を続ける上で必要なことと考えており、全体結果より高かった。乳がん体験者の場合、腋窩リンパ節切除によるリンパ浮腫（予防と悪化防止、浮腫によるさまざまな症状）、ホルモン療法による更年期障害様症状（ほてりやのぼせなどホットフラッシュ、動悸、睡眠障害など）、薬物療法による末梢神経障害（しびれなど）、倦怠感や悪心（むかつき）などが生じることがあるが、これらは周囲の人々には気づきにくい面がある。また、乳房切除、リンパ浮腫のむくみ、薬物療法による脱毛など外見の変化も生じたりすることがあり、周囲の視線に敏感になることもある。悩みや負担の自由記述をみると、さぼっているようにみられたり、周囲に迷惑をかけないように手術側の腕に負担をかけるような業務も無理をしてこなしたりしている体験者もいる状況がある。

図 10-2 がんになっても安心して仕事を続けるために必要だと考えること



(5) 診断時から現在まで仕事を継続した場合:仕事を継続できた一番の理由

上位には、「人間関係」(ソーシャルサポート)に関する項目があがっており、がん体験者だけの努力ではなく、周囲の人々によるサポートの重要性が示唆された。職場や仕事関係者(フォーマルな関係)の理解や支援だけではなく、インフォーマルな関係(家族や友人など、制度や形式に基づかない非公式な関係性)の支えが、仕事継続につながっていると考えられる。

「人間関係」(ソーシャルサポート)に関しては、非正規雇用者の方がより「仕事関係者の理解や協力」を一番の理由とする人が多い(正規雇用者 53 名:51.5%、非正規雇用者 75 名:68.8%)。

また、3番目には、自らの努力(14.0%)があがっており、仕事を継続する上で、がん体験者自身も努力し行動している。

また、「会社や社会の制度」は、正規雇用者は2割(23名:22.3%)が選択しているが、非正規雇用者は1割弱(9名:8.3%)である。現状としては会社や社会の制度は、仕事の継続にあまり寄与していないと考えられる。これは、そもそもがん体験者の就労支援にあうような制度がない、あるいは利用しにくい、雇用形態により制度が利用できるかどうか異なる、個々の企業のなかでの支援制度のばらつきなどもあるのではないかと推測される。

表 10-4 仕事を継続できた一番の理由 (選択式回答)

仕事を継続できた理由	正規雇用		非正規雇用	
	人数 (%)	(%)	人数	(%)
上司や同僚、仕事関係の人々など周囲の理解や協力	53	(51.5%)	75	(68.8%)
家族など会社以外の人々の支え	6	(5.8%)	10	(9.2%)
自らの努力(専門的な知識や技術など)	14	(13.6%)	10	(9.2%)
会社や社会の制度	23	(22.3%)	9	(8.3%)
その他	7	(6.8%)	5	(4.6%)
回答者計	103		109	

(6) 事業主もしくは仕事関係の人々からの理解や支援の状況

【診断時】

a) 仕事に関する相談相手

全体の調査結果に比べ、乳がん体験者はほとんどの項目で全体の結果より相談した割合が若干高い傾向にある。

正規雇用者と非正規雇用者で比較すると、非正規雇用者の場合、乳がん体験者全体の結果と同様に、がんと診断された時点での仕事に関する相談相手の第1位は「家族」(167名:78.4%)で8割近くが選択していた。しかし、正規雇用者の場合は、第1位は「上司」(164名:86.8%)で、「家族」は第2位だった。正規雇用者の9割近くは、がんと診断時に仕事に関して仕事関係者である上司に相談していたが、非正規雇用者は2割近く低かった。

表 10-5 診断時、仕事に関して相談した相手 (複数回答)

仕事に関しての相談相手	正規雇用		非正規雇用	
	実数	(%)	実数	(%)
家族	123	(65.1%)	167	(78.4%)
上司	164	(86.8%)	142	(66.7%)
同僚	95	(50.3%)	92	(43.2%)
主治医 (医師)	51	(27.0%)	42	(19.7%)
人事労務担当者	19	(10.1%)	13	(6.1%)
同病者 (患者団体などの会員含む)	10	(5.3%)	8	(3.8%)
職場の産業医、産業カウンセラーなど	4	(2.1%)	2	(0.9%)
医療ソーシャルワーカー	5	(2.6%)	5	(2.3%)
がん専門相談員	7	(3.7%)	5	(2.3%)
社会保険労務士	1	(0.5%)	1	(0.5%)
その他	8	(4.2%)	5	(2.3%)
回答者計	189		213	

b) 仕事関係の人々からの理解や支援の状況

がんと診断された当時の事業主、あるいは仕事関係者からの理解や支援は、「十分得られた」、「十分ではなかったがある程度は得られた」とあわせると、8割前後の乳がん体験者は、理解や支援は得られたと回答しているが、非正規雇用者の方が若干低かった。

表 10-6 仕事関係者からの理解や支援の状況 (選択式回答)

仕事関係者からの理解や支援	正規雇用		非正規雇用	
	人数	(%)	人数	(%)
十分得られた	153	(59.3%)	151	(52.4%)
ある程度得られたが十分ではなかった	55	(21.3%)	60	(20.8%)
全く得られなかった	11	(4.3%)	8	(2.8%)
必要なかった	15	(5.8%)	28	(9.7%)
無回答	24	(9.3%)	41	(14.2%)
計	258		288	



【現在、仕事に従事している人】

a) 仕事に関する相談相手

正規雇用者と非正規雇用者の相談相手を比較すると、診断時と同様、特に「上司」に関しては、正規雇用者（80名：86.0%）＞非正規雇用者（64名：52.5%）と、非正規雇用者は診断時よりさらに低く、上司への相談は、ほぼ半数にとどまっていた。同様の傾向は、「人事労務担当者」でもみられ、正規雇用者（11名：11.8%）＞非正規雇用者（6名：4.9%）にとどまっている。非正規雇用者は、上司や人事労務担当者には、相談しにくい、もしくは相談しても意味がないと考えているなどの可能性が考えられる。

割合としては低いですが、同病者への相談は、正規雇用者、非正規雇用者ともに1割近くあり、診断時より高くなっている。経験談など具体的な情報を求めている可能性がある。

表 10-7 診断時から現在までに仕事に関して相談した相手 (複数回答)

相談した相手	正規雇用		非正規雇用	
	実数	(%)	実数	(%)
家族	79	(84.9%)	96	(78.7%)
上司	80	(86.0%)	64	(52.5%)
同僚	52	(55.9%)	60	(49.2%)
主治医（医師）	23	(24.7%)	27	(22.1%)
同病者（患者団体などの会員含む）	11	(11.8%)	15	(12.3%)
人事労務担当者	11	(11.8%)	6	(4.9%)
がん専門相談員	2	(2.2%)	4	(3.3%)
医療ソーシャルワーカー	6	(6.5%)	5	(4.1%)
職場の産業医、産業カウンセラーなど	3	(3.2%)	2	(1.6%)
社会保険労務士	0	(0.0%)	0	(0.0%)
その他	7	(7.5%)	4	(3.3%)
回答者計	93		122	

b) 仕事関係の人々からの理解や支援の状況

仕事関係者からの理解や必要な支援の状況は、診断時と同様、「十分得られた」、「十分ではなかったがある程度は得られた」とあわせると、8割前後の人は、理解や支援は得られたと回答しているが、非正規雇用者の方が若干低かった。

表 10-8 仕事関係者からの理解や支援の状況 (選択式回答)

仕事関係者からの理解や支援	正規雇用		非正規雇用	
	人数	(%)	人数	(%)
十分得られた	153	(59.3%)	151	(52.4%)
ある程度得られたが十分ではなかった	55	(21.3%)	60	(20.8%)
全く得られなかった	11	(4.3%)	8	(2.8%)
必要なかった	15	(5.8%)	28	(9.7%)
無回答	24	(9.3%)	41	(14.2%)
計	258		288	



## (7) 仕事に関する悩みや負担

### a) がんと診断された当時の仕事に関する悩みや負担

がんと診断されたときに、仕事に関して悩んだことの上位は、表 10-9、10-10 に示す通りである。第 1 位は、正規雇用者「仕事の調整」(124 名：61.4%)、非正規雇用者「仕事を辞めるかどうか」(121 名 (50.2%) ) であり、正規雇用者は、仕事を継続することを前提にしたうえで悩みが上位に入っているが、非正規雇用者の場合は、第一に「仕事を辞めるかどうか」で悩んでいる。これは、がんの治療と仕事を両立させることへの気付き、職場での保証や支援制度不足、仕事の種類による迷いなどが考えられるが、非正規雇用者の半数は、診断時「仕事を辞めるかどうか」悩んでいることを医療者は把握した上で、就労に関する情報提供や相談窓口の紹介など積極的に介入していく必要があるといえる。

また、第 2 位は、正規雇用者、非正規雇用者ともに「仕事復帰の時期」があがっている。がんの場合、いつ頃仕事に復帰できるのかは、不確定要素が多い。ただし、今後どのような治療になるのか、治療にはどのくらいの期間がかかるのか、入院治療なのか通院治療なのか、治療により身体的にどのような影響がでるのか、それは徐々に軽くなるものなのか、不可逆的なものなのか、治療が終わったあとの通院はどのような間隔で行われるのかなど、不確定な部分も多いが、医師や看護師などに確認し自分の状況を把握しておくことも重要といえる。

表 10-9 がんと診断された当時、仕事に関して悩んだこと (上位 5 位)

順位	正規雇用者	非正規雇用者
1	仕事の調整	仕事を辞めるかどうか
2	仕事復帰の時期	仕事復帰の時期
3	職場の上司や同僚、取引先への説明の仕方	職場の上司や同僚、取引先への説明の仕方
4	職場の事務手続き (休職手続き、傷病手当など)	経済的な問題
5	経済的な問題	仕事の調整

表 10-10 がんと診断された当時、仕事に関して悩んだこと (複数回答)

仕事に関して悩んだこと	正規雇用		非正規雇用	
	実数	(%)	実数	(%)
仕事復帰の時期	119	(58.9%)	93	(38.6%)
仕事の調整	124	(61.4%)	79	(32.8%)
仕事を辞めるかどうか	75	(37.1%)	121	(50.2%)
経済的な問題	77	(38.1%)	83	(34.4%)
職場の上司や同僚、取引先への説明の仕方	91	(45.0%)	92	(38.2%)
職場の事務手続き (休職手続き、傷病手当など)	79	(39.1%)	35	(14.5%)
仕事 (顧客) の引き継ぎ	32	(15.8%)	15	(6.2%)
手当や保障がない	2	(1.0%)	3	(1.2%)
顧客の減少	1	(0.5%)	2	(0.8%)
その他	6	(3.0%)	3	(1.2%)
回答者計	202		241	

b) 診断時以降現在までの仕事に関する悩みや負担

診断時以降現在に至るまでの仕事に関する悩みや負担の上位は、表 10-11,10-12 に示す通りである。第 1 位は、正規雇用者、非正規雇用者とも「通院や治療のための勤務調整や時間休の確保」で、6-7 割が選択していた。前述のがんになっても安心して仕事を続けるために必要だと思ふことの回答でも、「勤務時間を短縮できる制度」や「長期の休職や休暇制度」が上位にあがっており、治療を継続しながら、あるいは治療終了後に定期通院を続けながら仕事復帰しても、定期的な通院や通院治療で休むことの難しさがあるのではないかと考えられる。また、治療のある日は、待ち時間も含めると 1 日がかかりという声もよく聞かれ、治療の翌日は体調が悪くとも仕事はできないという場合もあり、仕事や休みの調整の難しさがあると思われる。

表 10-11 診断時以降現在までの仕事に関する悩み(上位 5 位)

順位	正規雇用者	非正規雇用者
1	通院や治療のための勤務調整や時間休の確保	通院や治療のための勤務調整や時間休の確保
2	病気や治療による副作用や後遺症による症状	体力の低下
3	外見の変化	病気や治療による副作用や後遺症による症状
4	仕事復帰の時期	外見の変化
5	体力の低下	仕事復帰の時期

表 10-13 診断時以降現在までの仕事に関する悩み (複数回答)

仕事に関して悩んだこと	正規雇用		非正規雇用	
	実数	(%)	実数	(%)
体力の低下	58	(46.8%)	75	(54.0%)
病気の症状や治療による副作用や後遺症による症状	32	(57.3%)	74	(53.2%)
通院や治療のための勤務調整や時間休の確保	91	(73.4%)	91	(65.5%)
仕事復帰の時期	59	(47.6%)	53	(38.1%)
経済的な問題	47	(37.9%)	50	(36.0%)
外見の変化	70	(56.5%)	66	(47.5%)
病気の症状や治療による副作用や後遺症への対処方法	32	(25.8%)	36	(25.9%)
職場の上司や同僚、取引先への説明の仕方	32	(25.8%)	35	(25.2%)
職場の事務手続き	35	(28.2%)	19	(13.7%)
職場でのコミュニケーション	22	(17.7%)	19	(13.7%)
再就職できるかどうか	14	(11.3%)	23	(16.5%)
手当や保証がない	4	(3.2%)	1	(0.7%)
職場(仕事先)でのがんに対する偏見	26	(21.0%)	19	(13.7%)
仕事(顧客)の引き継ぎ	13	(10.5%)	5	(3.6%)
顧客の減少	1	(0.8%)	2	(1.4%)
予期せぬ部署異動・職場異動	8	(6.5%)	5	(3.6%)
その他	7	(5.6%)	4	(2.9%)
回答者計	124		139	

(9) 診断時から現在までに仕事を辞めた場合

a) 離職までの期間

離職までの期間では、非正規雇用者のほぼ半数（42名：46.7%）は、がんと診断直後から3ヶ月未満までで離職しており、がんと診断されてから早い時期に仕事をやめている。

表 10-13 離職までの期間

離職までの期間	正規雇用		非正規雇用	
	実数	(%)	実数	(%)
直後～1ヶ月未満	0	(0.0%)	4	(4.4%)
1ヶ月	6	(8.6%)	24	(26.7%)
2ヶ月	3	(4.3%)	14	(15.6%)
3ヶ月～半年未満	6	(8.6%)	15	(6.7%)
半年～1年未満	12	(17.1%)	6	(6.7%)
1～3年未満	18	(25.7%)	15	(16.7%)
3～5年未満	7	(10.0%)	4	(4.4%)
5～10年未満	8	(11.4%)	5	(5.6%)
10年～20年未満	8	(11.4%)	2	(2.2%)
20年以上	2	(2.9%)	1	(1.1%)
回答者計	70		90	

b) 仕事を継続できなかった理由

仕事を継続できなかった理由は、非正規雇用者では「仕事を続ける自信がなくなった」（71.4%）が一番多く7割を占める。次に「仕事関係の人々に迷惑をかけたと思った」（54.3%）があがり、「治療や静養に必要な休みをとることが難しかった」（31.4%）と続く（表 8-11）。一方、正規雇用者では、「仕事関係の人々に迷惑をかけたと思った」（53.1%）が一番多く、2番目が「仕事を続ける自信がなくなった」（36.7%）であった。

仕事を続ける自信がなくなった理由については、76 ページの仕事に関する悩みの上位にあがっている「通院や治療のための勤務調整や時間休の確保の困難」、「体力低下」などが影響しているのではないかと思われる。

表 10-14 仕事を継続できなかった理由

(複数回答)

仕事を継続できなかった理由	正規雇用		非正規雇用	
	実数	(%)	実数	(%)
仕事を続ける自信がなくなった	18	(36.7%)	50	(71.4%)
仕事関係の人々に迷惑をかけたと思った	26	(53.1%)	38	(54.3%)
治療や静養に必要な休みをとることが難しかった	14	(28.6%)	22	(31.4%)
もともと辞めるつもりだった	10	(20.4%)	8	(11.4%)
辞めるよう促された、もしくは 辞めざるを得ないような配置転換をされた	7	(14.3%)	7	(10.0%)
解雇された	6	(12.2%)	6	(8.6%)
その他	33	(67.3%)	18	(25.7%)
回答者計	49		70	